

[COMMUNION]

WEB:http://www.nskk.org/tokyo/index.html  
E-mail:comm.tko@nskk.org  
PHONE:03-3433-0987  
FAX:3433-8678 Dicese Office



第5号 (通巻1240号)

2012年7月22日

編集:広報委員会 委員長:渡辺康弘

日本聖公会東京教区

港区芝公園3-6-18

《平和メッセージ》

### 小さな小さな声を聴く



主教 アンテレ 大畑 喜道



故あって老人福祉施設を見学しました。施設は新しく、とてもきれいなのですが、入居者一人一人を大切にしますというキャッチフレーズとは裏腹に、働いている人はみなマニュアルを重視して、入居者の思いや必要よりも管理維持に動いているような気がしました。注意しないととんでもないことになるなど感じました。東日本大震災の被災者のために日本聖公会では各教区が様々な支援をしています。一緒に歩こうプロジェクトはその活動の中で、一人一人に傾聴していくことを基本理念にしています。これは私たちが平和を求めていくときに大変に重要なことです。マニュアルで済ませば、大きな活動ができるかもしれませんが

が、小さな小さな声に誠実に応えていく事がもつとも神様に良しとされる方法だと信じているからです。一方で小さな声を無視した復興の動きもあります。私たちは平和を作り出すものとして、何を大切にしているか。さて話は突然に飛躍しますが、戦乱下克上の時代が終わり、豊臣秀吉によって天下統一の時代になると、治安維持のため、五人組制度が確立します。自分勝手に生きるような世界から相互に助け合う絆を大切にしようとする新しい時代の組織を受け入れ



教役者宿泊研修会の聖餐式 (6月20日箱根)

ていったのかも知れませんが、江戸時代でも一般的な統治の末端組織として運用されました。庶民はその問題性を感じつつも大きな権力に抗うことなどできずにそれを受け入れていきます。近代になって五人組は消滅しますが、第二次世界大戦中の隣組にその性格は受け継がれ、町内会が組織

うな組織が、じわりじわりと人々の心を支配しました。絆を大切にしようということはとても大切なことです。人は一人ではない。勿論、相互扶助するような社会は重要です。しかし絆だけに目がいって、その枠組みから排除される人が出る危険性に注意しないと、間違った方向へ誘われ、手遅れになってしまいます。注意深くしていかないと、気がついたときには管理監視社会へ、排他的で、意見の自由に言えない様な社会になってしまつたら大変です。一人一人を大切にしていく社会、個別的な対応をしつつ、相互に扶助しあうということでないとは本当の平和な社会を樹立することはできないのではないのでしょうか。一人一人の必要は異なっています。結果は大きなものではないかもしれませんが、小さな声に誠実に応えながら日々主イエスと共に進んでいきたいと思えます。

# 宣教は「主の死を告げ知らせる」ことから始まる

― 教役者宿泊研修会に参加して ―

広報委員長 渡辺康弘

※6月18〜20日にわたり箱根のスコールプラザを会場に教役者宿泊研修会が開かれた。今年は9月に開催される宣教協議会に向けて2月に「東京教区の宣教を考える会」(テーマ:「だれと共に、どこへ行く」という準備会を行ったが、そこで話し合われたことをさらに深め、また来る聖職不足という事態に向けてどのような牧会のあり方が考えられるかを常置委員の山田益男さんに発題していただいた(3頁記事参照)。

研修会は5部に分かれ、第一部は主教メッセージと質疑応答、第二部、三部は宣教について4グループに分かれての話し合い、第四部は「聖職不足を考える」、第五部は聖書研究を2グループに分かれて行った。

ここでは研修会のほんの一部を纏めることしかできないが、あらためて宣教について考える参考になればと思う。

主教メッセージの冒頭で、コリント11・26の聖句「あなたがたはこのパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです」を引用し、「私たちの根本、またなすべきことは何か、それは聖餐式であり、主の死を憶え、その絶望の先にある復活の希望、それはどんな絶望も乗り越えられるという信仰に堅く立つことである。



教会が小さな声、つぶやき、うめきを大切にすることによって、組織が

- ・すべての教会が、この5指標をしないか。
- ・5指標は1つのたたき台であつ

て、東京教区として理解しやすい宣教方針をつくる必要がある。そして常に祈りの中で憶えるものになりたい。

2002年に出された日本聖公会の宣教方針があるが、教会には浸透していない。単なるお題目にならないように、各教会で議論し

具体的な計画を立てるための指針とすることが大切。

その後のグループでの話し合い、聖書研究の中で、特に印象に残ったことを列挙すると、

・司祭と信徒が祈りによって支え合う信頼関係と喜びが大切。

・最たる宣教は礼拝である。礼拝や祈りによって養われる霊性によって、宣教の現場が見えてくるのではないか。

・信徒が持っている賜物を生かし、輝かせる場をできるだけ多く提供する。

・宣教はイエスの働いている現場に参与すること。



参加者達が真剣に言葉の真意を傾ける

・私たちは、イエスの宣教に参与できたという小さな喜びを得たときに満たされる。

・私たちは人の痛みに鈍くなっているのではないか。また痛みを抱えている人と本当に向き合えているのか。

・神が自分を選ばれたという自分の心を見つめ直すことが必要。

・目を開かれた盲人が、イエスに従って見たものは十字架であった。必ずしも望んでいるような結果が与えられないかもしれないが、そこに神の計画がある。

・私たちにバルティマイのような必死に神の救いを求める飢え、渇きがない。

・堅信によってそがれた神の霊は、メシアにそがれた霊と同じであり、私たちはメシアの働きの一端を担う使命を負っている。

― キリスト教はその始めから、逆境

と迫害の中で力強く広がっていった。その原動力は「主の死」という私たちに先立って困難の中を歩み十字架に向かつて行くイエスの歩みがあったからだろう。

復活は、祈りによって困難な道を進むものは、その先に必ず希望があることを示している。教会が、もし困難を避け、安易な道を行くならば、そこに希望は与えられないかもしれない。

いろいろな意味で宣教の難しい時代だが、少しずつ痩せ細っていく聖公会の現状に飢えを感じ、真剣に祈り、行動することからしか状況は打開できないであろう。

## 聖職不足を考える

山田 益男

「聖職者不足」という問題の原因を考えると、まずは「聖職志願者不足」に至る。さらにその原因はとなると「信徒数減少」「若い信徒が少ない」ことに至り、結局は「宣教の問題」に帰着する。

囲いの中の羊、教会内の宣教については、聖公会は従来型の牧会体制のもとで親から子へとという世代交代がそれなりにうまくいっていたが、この数十年状況が変化している。小学生・中学生にはじまり若い勤労者を教会に呼び集めようとしても社会環境がそれを困難にしている状況が起きているが、教会はこれらへの対応が取れていない。教会と距離を持ち始めた信徒、教会に来ることのできない信徒への対応がとれていない。教会に連なっている信徒に対しても堅信を受けた後の信徒教育という形で組織的な対応はなされていない。自立した信徒を育てる信徒教育が不十分であるといった問題点が挙げられる。

世の隅々にまで福音を述べ伝えること（マルコ16・15）が教会の使命

であることはACCの5指標にも挙げられているが、我々は囲いの外の羊である教会外の人々へ福音を伝える努力をしてこなかった。東日本大震災の出来事を通して、いま、我々の聖公会は教会外の方々と向き合いつともに歩む機会を与えられているが、これをよき学びの時としたい。この働きに加え、今なすべきことは



数教会の牧会を複数の聖職者と信徒の協働態勢で担うチームミニストリーが必須と思われる。A、B、C、D4つの教会群にP、Q2人の司祭が派遣されているケースを想定し、モデル案を提示する。聖職しかできない仕事を聖職者に、他は信徒が積極的に担う形態を整える。チームミニストリーを担う協働者は上記P、Q二人の司祭とA教会信徒の牧会補助者La、B教会信徒のLb、C教会信徒の者Lc、D教会信徒のLdの計6名で構成される。主任司祭Pは牧会会議の議長となり、少なくとも週1回の定例牧会会議を招集する。牧会会議では協働者間の情報交換（業務報告、連絡事項の伝達）がなされ、当面各自が担うべき業務の優先性を検討し、それぞれの担当業務を確認する。

教会活動としては次のことに力を入れてゆく必要がある。①幼児から大学生に対する教育プログラムの開発。②仕事に追われる世代への奨励発信。③「教会の働き人養成講座」や「若者向け信徒講座」といった信徒講座のプログラム開発。④現代人に分かる言葉で福音メッセージをネット発信。

聖職不足という事態への対応は複

（渋谷聖ミカエル教会信徒・常置委員）



夕食のレセプションの席で話をする大畑主教

## 司祭と語ろう (その3)

司祭 橋本克也

今回は、昨年、慣れ親しんだ横浜教区を離れ、現在、神田キリスト教会で牧会されている橋本克也司祭に信徒の葛西雅恵さんと鈴木出さんからお話を伺っていただきます。



— まず は、教会へ行くようになったきっかけ、またご家族のことなど、お聞きしたいのですが。

橋本 僕は1944年に満州のハルピンで生まれ、戦後、家族と共に引き揚げて横浜の叔父のところに住みました。そこにアメリカに渡った祖父との関係でシアトルの聖公会の日系人司祭が訪ねてきて、その方に母が持っている悩みを相談したところ、横浜聖アンデレ教会に行くように勧められたのがきっかけです。当

時教会には中高生も多く楽しかったですね。春頃に行くようになってクリスマスには洗礼を受けました。

— その後、先生は東京農大へ行かれますよね。それはどうしてですか。

橋本 はつきりした理由はありませんが、子どもの頃から視力が低かったため、眼科の先生が緑とか自然の中で働くのがいいのではというアドバイスをくれました。当時、祖父がシアトルで農園をしていたので、そこに渡って農業をするのもいいのかなと漠然と考えてのことだと思います。

— 卒業後、すぐ神学院に行かれたのはなぜですか。

橋本 一つは大学に行くバスの途中に神学院があり、教会やキャンプで出会った先輩たちがいたので、よく遊びに行っていました。その人たちとのつながりは大きなきっかけになりましたね。

また、私も教会の活動が好きでしたから、当時の牧師さんが私の名親を通してですが、神学院に行くように勧め

てくださったので、だんだんと思いが育っていききました。

— 神学院では視力のことでも勉強や生活に不安とかありませんでしたか。

橋本 不安は無かったです。が、たしかに神学をするということは、本を多く読まなければなりません。正直言って十分な学びは出来なかつたと思います。ただ必要な本は拡大鏡を使って読みました。

— 学生の方が詩編を大きく紙に書いてくれたという話も聞きましたか。

橋本 そう、原稿用紙にみんなが手分けして書いてくれましたね。そのように、みんなの助けがあつて、本来出来ないことが出来たんだろうと思います。本はあまり読めなかつたですが、人との関係の中で多くの学びを得たし、それは今でもそうです。

— 完全に視力を失ったのはいつ頃ですか。

橋本 確か医者から失明するという診断を受けたのは小田原の教会にいた頃ですから32才の時です。

## 【司祭の1冊】

『パウロ』

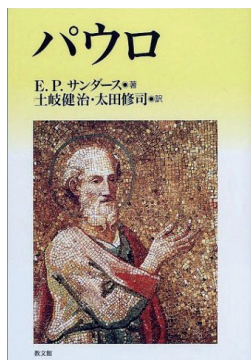
(E・Pサンダース著)

土岐健治・太田修司訳

教文館 1994年

司祭 菅原裕治

本書は、パウロの評伝です。著者は、初期ユダヤ教研究、パウロ研究、イエス研究が専門です。本書の特色は、著者の初期ユダヤ教理解にあります。それは、従来のキリスト



教神学・教会が持つ「律法主義」、「行為主義」、「義認主義」等とは異なり、その宗教的類型を「契約規範主義」と捉えているからです。そこから著者は、パウロをいわゆる「律法主義」的ユダヤ教に対する反対論者とは見ず、「参与論的終末論」に立つとします。宗教改革以降、ルターのパウロ理解の影響で、パウロといえば信仰義認中心という認識が通説となつていきます。それは私たちの「39箇条(第11条)」にもあり

ます。しかし、本書では、それは神学体系ではなく、表現の一つに過ぎません。

— それでは、何がパウロをユダヤ教から移行させたのかというところ、初期ユダヤ教の「契約規範主義」(イスラエルの救い)とパウロの「参与論的終末論」(世界の救い)という違いの認識です。本書の描く史的パウロは、常にその新旧の間でジレンマを感じつつも、キリストにある確信によって

情熱を持って語りつづける宗教的思想家なのです。パウロ書簡を素朴に読めば、様々な教

会で語ることが少し違う点に気がつきます。それは、パウロが直面した多面的な問題に対して自分の多様な解答を、相互に調和させていないからです。本書は、現代でも重要な事柄とは、安易に整った解答を求め、そこから全てを理解し、行動することではなく、パウロの苦勞する姿から学ぶことであると教えています。

正直、失明したらこの働きを断念しなければならぬのかと考えました。でも障害者の支援をしていた後輩の信徒の方が、出来る限りのことをして助けるからと励ましてくれて、それで、私もできるかも知れないという所に立てました。それは、一つの大きな転機だったと思います。

実際、彼はいろんな意味で具体的に支えてくれましたし、教会の人も私を受け入れてくれました。その時、出発点でダメかも知れないと思うのと、出来るかも知れないと考えるのでは大きく違うことに気付きました。

— すばらしい出会いが沢山あったんですね。  
橋本 私が特に良かったと思っているのは、ある日、ラジオを聞いていたら「いのちの電話」の相談員募集がありました。それなら私にも出来るかもしれないと思い連絡して事情を話し、2年間の養成コースに参加して、その後6年間相談員を続けました。それでも、多くの出会いと気づ

きが与えられました。  
— 昨年、横浜教区から移られました。何か理由があったのでしょうか。

橋本 いくつかありますが、女性司祭が働かれていることと、信徒奉事者の分餐が認められていることですね。横浜教区にも信徒奉事者はいますが、分餐は認められています



んし、女性の信徒奉事者もいません。私にとって、いろんな形で女性や信徒の働きに開かれた東京教区の歩みというのは、とても納得するものがありましたし、自分の働きの仕方も広がると思いました。  
— 先生の生き方に勇気づけられている人は沢山いると思います。

橋本 そうであれば嬉しいですね。ただ今年で68才になります。この年になるまで牧師を続けられたことに驚いています。もし私が身をもって伝えられることがあるとすれば、自分の枠の中だけでは出来ないことが、理解して協力してくれる人がいれば、必ず出来るということでしょう。もちろん他の聖職と同じことは出来ないかもしれませんが、逆に私にしか出来ないこともあると信じて、やれることを一生懸命やってきました。

— 最後に信仰と生活委員会の委員長になられて、取り組みたいことはありますか。  
橋本 まだ東京教区のことはいくわかりませんが、もったいないなと思ったのは、いろんな働きがあり、労力をかけて素晴らしい報告書などが沢山でているのに、作っただけで終わっていることです。何かそれを生かすような働きを考えていきたいですね。  
— 期待しています。今日は有り難うございました。

会堂長ヤイロは、村で尊敬される存在でした。そのヤイロの大切な娘が、重い病気にかかってしまいました。

父親は、どのような努力も誰の助けも、娘の命を救えないと分かった時、イエスに救いを求めました。そして社会的な立場も名誉も投げ出し、群衆が注目する中、イエスの足もとにひれ伏したのです。

そして「どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう。」と願い続けます。そこには娘の命を思い、必死になる父の姿があります。

しかしそのヤイロに家の者から娘の死が告げられます。ヤイロの努力は無駄になってしまったのでしょうか。深い悲しみの中にいるヤ

《聖書を開いて》③  
「少女よ、起きなさい！」  
(マルコ5・1～24、35～43)

司祭 神崎 和子

イロに向ってイエスは「恐れることはない。ただ信じなさい」と言われます。そして「なぜ泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ」と言われます。

イエスは子どもを手を取って「タリタ、クム（少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい）」と言われたのです。

「起きる」というこの言葉は「死人を」甦らせる」「復活させる」事をも意味します。イエスは、この娘が、この地上での生命を回復した場合も、あるいは神と共にいる「死後」に生命を移されたとしても、全く同様に、顧みて、憐れみを与えて下さるのです。私たちが苦しむ時、死んだように力を無くしている時、今も尚イエスは私たちにも「タリタ、クム（起きなさい）」新しく生きるのです、と愛を持って言われます。

## 「いつしよに歩こう！プロジェクト」の1年

司祭 中村 淳

はじめに東北での働きをお与えくださった神さまと皆様  
に感謝します。この1年はわ  
たしにとって本当に恵みの時  
でした。ありがとうございます  
す。同時に教会を空けご迷惑  
をおかけした皆様にお詫びい  
たします。



プロジェクトは  
その始まりの時から  
支援するものと  
受けるもの、その  
間に横たわる想い  
の違いがありました。名称も  
話し合いの中から決ましまし  
た。いつしよに歩くことのむ  
ずかしさを実感した1年でも  
あったように思います。その  
中で大切にしてきたことがあ  
ります。一つ目はミッション  
ステートメントの一番目「わ  
たしたちは、東日本大震災に  
より困難を負って生きる人々  
に敬意を払っていつしよに歩  
きます。」の「敬意を払って」

という部分です。このことを  
わたしたちは、「支援とは外  
からやってきたものが、自分  
たちが行いたいことを行つた  
り、自分たちにとつての理想  
的な生活を押し付けたりする  
ことではなく、被災された  
方々が必要とするもの、被災  
された方々が自らの努力に  
よつて築き上げていくことを  
お手伝いすることこそが支援  
である」と理解して活動を  
行ってきました。もう一つ  
は「顔と顔の  
見える関係」  
の中で活動す  
る、というこ  
とです。プロジェクトの活動  
はそもそも東北教区のお働き  
をお支えし、継続するという  
目的で始められました。東北  
教区のお働きは被災された信  
徒さんの安否確認から始まっ  
ているのです。そこから人と  
人がつながれていくという中  
で活動が進められていきまし  
た。これらの活動からあらわ  
れてきたものは「出会わされ  
ている」という事実でした。

### 管区総会で語られた、韓国ソウル教区金根祥（キム・グンサン）主教のメッセージ

+平和の主イエス・キリストのみ名によってご挨拶申し上げます。

先週私は大韓聖公会の公式訪問団と共に東北地域を訪ねて、加藤主教様と実行委員の皆さんのご案内で二日間に被害地を見回せて頂きました。本当に惨憺たる心を抑えきれず、訪問先ごとに涙ぐんだ祈禱を捧げて参りました。直接被害地を目の当たりにしながら啞然とするほどの傷痕に驚きの連続であったし、韓半島にも及ぼしうる大きな災害を日本列島ごと防いでくれたという事実を体で感じました。

現時点では、いつ本来の暮らしと日常に戻れるか見通しが無いのかのように思えますが、日本聖公会のすべての教区がお祈りと誠意を寄せていることや「いつしよに歩こう！プロジェクト」の魂を込めた労苦から受けました。

日韓両国聖公会の公式交流（1984-2014）を眺めながら、トピック（TOPIK）と沖縄平和協議会、青年キャンプ、社会宣教研修などの日韓協働委員会の様々な合同事業を通して、そして日本各地で働いている19人の韓国聖公会出身教役者らの活動により、真の協働宣教が持続されることを心から望みます。何より、東日本大震災被災地のための支援活動にも、先週訪問した一つ目のボランティアチームを始めとして、現地訪問、その他可能な方法で皆さんと共に祈り、汗を流しながら歩いていきたいと思えます。

2012年5月22日

大韓聖公会議長・ソウル教区主教

パウロ 金 根祥

私たちが出会わされた人々が  
どこかでつながっている、と  
いう経験をたくさんしまし  
た。関係がないはずの方々が、  
友人の友人であったり、遠い  
親戚であったりと不思議な体  
験をたくさんしました。

神さまのお働きは人と人の  
間に、そして人を通して働か  
れることもたくさんあるよう  
です。東北の地は「再創造」  
の中にあるのだと思います。  
わたしたちはその神さまの「再  
創造」の業に働き人として招  
かれてるように思えてなり  
ません。プロジェクトとして  
の課題は数え上げればきりが  
ありません。しかしわたした

ちは教会の業としてこの働き  
を行っていることを忘れては  
なりません。そこで先頭をきつ  
て働かれておられるのは神さ  
まご自身です。そのひそやか  
なお働きに、目を凝らして、  
耳を澄ませて、従っていき  
いと心から思っています。

# ようこそ真光教会へ



真光教会は教区の城南グループに属し、東京都の南の端、町田市の南つくし野1丁目にある。鉄道の駅で一番近いのは東急田園都市線のすぐかけ台である。現在受聖餐者数は83名であるが、毎主日の聖餐式には40名ほどが出席し、礼拝の時の聖歌奉唱がよくそろっていることには定評がある。男性諸兄はご老体の方を含めて駐車場の草取りや建物の保守作業に励み、女性諸姉はお食事当番、園芸部、手芸部、パウンドケーキづくりなどに婦人会グループとして大活躍し、バザーは男女全員参加で近隣の住民たちも訪れる。

明治8年(1875年)で、ウイリアムズ主教によって深川(現在の江東区)の地に聖三一教会の名で建てられ、1889年になって真光教会と改称された。その後1923年の関東大震災、1945年3月の大空襲と2度にわたって壊滅的被害を受けた。戦後は転々と礼拝の場所を移した後、1953年に北区の赤羽の民家を買い取り、そこを教会とした。



(6月24日) 教区主教より授けを受ける

1973年には、東京教区成立50周年の記念事業として、新しい土地に教会を設立することが計画され、その具体化として真光教会を新開地に移転させて開拓伝道を行なうことが教区会で決まり、常置委員会は北区の土地の売却を決定。赤羽で牧師に任命されたばかりの野田昭次司祭が1973年中につくし野の地に移住、同年9月8日に2階建ての牧師館兼集会室(礼拝堂として使う)の起工式が行なわれ、翌74年6月9日にその竣工式が行なわれた。当時、1973年中につくし野の地に移住、同年9月8日に2階建ての牧師館兼集会室(礼拝堂として使う)の起工式が行なわれ、翌74年6月9日にその竣工式が行なわれた。当時は住宅地として計画されていたが、家は僅かしかなかった。赤羽時代の信徒はるか遠いつくし野の教会に通うことはできず、まさに新天地で新たな教会員をつくり出さなければならなかった。こうした真光教会を支えて発展の端緒をつくり出したのは城南教会グループで、1975年に「真光教会宣教協力委員会」を作った野田司祭と協力することになり、4年間にわたって各教会から出た10名の協力委員が助けてくださったという事実を忘れることはできない。何人かの方は自分の教会

から一時離れて真光教会員となって協力してくださった。このようにしてスタートした教会は教会員数も増えて、1991年1月13日にはいよいよ17年間礼拝を守ってきた集会室から、より大きい建物に移るため、聖堂起工式を行ない、同年9月16日には聖堂聖別式が行なわれた。簡素なイメージの聖堂である。このように真光教会は、明治の創立の時から新開地での伝道の拠点としての役割を果たし、その精神は町田の南つくし野への移転でも受け継がれている。地域社会への伝道活動は、古くて新しいこの教会の存在理由ともいうべきで、最近も鈴木裕二司祭の牧会のもとに「田園都市線沿線友の会」が始まって、近隣の方がたを対象に、教会での公開講演会やクリスマス・キャロリングなどを行ない、現在の牧師の長谷川正昭司祭にこれが受け継がれている。

(信徒・吉田昌夫)

《8月の奉献先から》

「青年活動」について

青年委員会では、「東アジアの平和と宣教課題を担う青年の育成」という大きなテーマを抱き、各教区青年担当者の協力を得ながら、青年たちの学びと体験のサポートをしています。

ことに今夏は「全国青年大会」の開催を控え、仙台の青年達を中心に実行委員会を編成して準備を進めています。大会のテーマは『remember

〜ひかりを灯そう〜』で、「もう一度(once again)聖公会の青年達(member)が集まり、皆で一つの光りを灯そう」という思いが込められています。昨年3月



11 日の地震や津波、その後の原発事故によって今もなお苦しんでいる生活が強いられる方々

の現実に、心を寄せ、記憶し続け(remember)たいと思えます。92年以降今年で6回目を迎える全国青年大会は、8月23〜26日に仙台で開催です。26日はU26(ゆーじろー)集会も予定中です。U26とは、26歳以下の青年達の自主的な集まりで、全教区を5ブロックに分け、それぞれにブロック長を置き、青年活動を盛り上げるグループです。第1回目の集会は今年2月に市川で開催され、各教区教区報に報告がなされていますのでご参照下さい。また9月の宣教協議会(浜松)で、5名の青年達にスチュワードとして下働きをしながら、協議会の内容に触れる機会として携わって頂きます。その他、今年は開催されませんが、「日韓聖公会青年セミナー」も毎年、韓国・日本と交互に開催し、両国の

青年達が手を携え、同じ方向を向いて歩むことを目指し、様々な宣教課題を学んでいます。青年委員会担当 京都教区金沢聖ヨハネ教会 司祭 矢萩新一 《9月の奉献先から》 野宿者支援活動 ともにたべる ともにいきる 渋谷で野宿生活をしている人々に関わり始めて7年半、当初月1回だった給食活動は、現在週1回になり、活動場所である渋谷区役所駐車場に集まる人は40人から2008年秋以降倍増、さらに昨年の東日本大震災以降150人、そして今年5月以降は200人に加え、他所での配食分と合わせて毎回260食を準備している。

寝る部屋もなく、食べるものもないというもつとも貧しい状況に置かれている野宿生活者たちは、一般市民の襲撃(暴力)や排除(追い出し)、福祉事務所による生活保護の

「水際作戦」などにもさらされておられ、あらゆる形で尊厳をふみにじられ、いのちを脅かされている。特に渋谷区においては、行政による人権侵害や排除が何年にも渡って続いている。6月11日早朝、渋谷区は事前告知も一切しないまま、美竹公園、渋谷区役所駐車場、区役所前トイレの三ヶ所を同



時封鎖し、そこに寝泊まりしていた野宿生活者を一斉に排除した。梅雨と台風の冷たい雨風の中、野宿生活者たちは突然寝場所を失った。私たちは同じ渋谷で活動している「の

じれん」と協働し、緊急の物資支援を行うと共に渋谷区に対して抗議の声をあげ、野宿生活者のいのちと尊厳を守る取り組みに奔走している。詳しくは、渋谷区役所駐車場の野宿生活者と私たちの取り組みを題材にしたドキュメンタリー映画「渋谷プラン ニューデイズ」をご覧ください。聖公会野宿者支援活動・渋谷代表 榎原民佳 (渋谷聖ミカエル教会信徒)

あよっと聖書、ときどきユーモア(二)

結婚式

信徒「先生、なんか最近、結婚式を多く頼まれるようですね」  
牧師「まあ、でもなんとなく複雑な気持ちだよ」  
信徒「えっ、どうしてですか。嬉しいことじゃないですか」  
牧師「だって結婚式多いといっても、もう一度僕に頼みたいというリピーターが増えているだけだからなあ」

※次号は10月21日発行予定